

# 平安時代の四国遍路

——辺路修行をめぐって——

寺内 浩

## はじめに

現代において四国遍路といえは八十八ヶ所の札所寺院を巡ることを意味するが、周知の通り、そうした四国遍路が成立するのは中世末期あるいは近世初期になってからのことである。しかし、それ以前においても修行のため僧侶などが四国の周辺部を巡り歩くことは盛んに行われていた。むしろ、そうした四国を巡り歩く修行形態の延長線上に八十八ヶ所寺院が成立したといふべきであろう。僧侶たちによるこうした修行がいつごろから行われるようになったかを確定することは困難だが、少なくとも平安時代末期には四国の海岸を巡る修行形態は存在していた。次の三つの史料はそのことを示すものである。

(ア)『今昔物語集』三二—一四

今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ、四国ノ辺地ト云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海辺ノ廻也。其ノ僧共□ヲ廻ケルニ、思ヒ不懸ズ山ニ踏入ニケリ。深キ山ニ迷ニケレバ、浜辺ニ出ム事ヲ願ヒケリ。(後略)

(イ)『梁塵秘抄』

われらが修行せし様は 忍辱袈裟をば肩に掛け また笈を負ひ 衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む

(ウ)『南無阿弥陀仏作善集』

(前略) 生年十七歳之時、修行四国辺(後略)

古代の僧侶の修行といえは山林修行が有名だが、当時においては海岸を巡り歩くこともまた修行の一つの形態であった。(ア)に「四国ノ辺地ト云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海辺ノ廻也」、(イ)に「衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む」とあるように、四国の海岸線を歩き、修行する僧侶が当時すでに数多くいたのである。(ウ)は東大寺再建に努めた重源(一一二二—一二〇六)の著作で、「十七歳之時」は一一三七年になる。この史料は原本が残っており、それには「辺」に「へち」と振り仮名が打たれている。従って、「四国辺」は四国の海岸部と同義と考えられるので、重源は一二世紀の前期に四国の「海辺ノ廻」を行っていたといえよう。

さて、四国遍路に関する研究論文は数多いが、そのほとんどは近世の四国遍路を対象としたものであり、平安時代の四国における「海辺ノ廻」の内容及びその成立を取り上げた研究は関係史料が少ないこともあってあまり多くはない。

近藤喜博氏は、四国の辺地すなわち海岸廻りの道の文献上の初見は平安時代末期であるが、奈良時代にすでに辺地辺土的なものが四国の海辺を廻っていたのではないかとされ、そうした道の人々が踏み巡った背景には補陀落信仰があったとされている。また四国辺地の形成には熊野辺地の感化があったとされている。

五来重氏は、海辺の巨巖・経塚などの行場を巡る辺路修行は「海の修験道」といふべきもので、その信仰対象は補陀落であり、蓬萊であるが、究極的に

は常世である。そして、こうした辺路修行は空海以前から存在していたとされている。<sup>③</sup>

頼富本宏・白木利幸氏は、近藤・五来両氏の研究を総合するかたちで、辺路修行とは海の彼方にあると信じられた常世の国に至ることを目的として海辺の道を巡る「海の修験」である。辺路修行に仏教の要素が加わることにより常世の国は補陀落浄土とみなされ、辺路修行者は常世の国としての補陀落を思慕しながら辺路を巡っていた、とされている。<sup>④</sup>

このように、平安時代における「海辺ノ廻」という修行形態が、日本古来の海洋信仰に平安時代になって隆盛する浄土信仰とりわけ補陀落信仰が加わって生まれたものであることは諸説のほぼ一致するところである。ただ、これまでの研究では「海辺ノ廻」の実態についての当時の史料に即した検討がやや不十分であるように思われる。また、なぜ四国において「海辺ノ廻」という修行が盛んに行われたかも明確にはされていない。以下では、こうした点に留意しながら、平安時代の四国における「海辺ノ廻」、すなわち辺路修行<sup>⑤</sup>について考察を加えていくことにしたい。

## 一 辺路修行の実態

海の彼方に根の国、常世の国を想定する海洋信仰は日本古来のものだが、山林修行と異なり平安前期までは海岸部で修行をしていた様子を示す史料は少なく、室戸で修行したとする空海の『三教指帰』がある程度である。しかし、平安時代後期になると海岸部を巡り歩く修行者たちが史料上にしばしば見えるようになる。<sup>⑥</sup>

### (エ)『為忠家後度百首』

ちる花やいそのへちふむやまぶしのこけのころものうはぎなるらん

なみかくるへちにちりしく花のうへをころしてふめはるのやまぶし

『為忠家後度百首』は一二世紀前半の成立だが、これらは山伏が「へちふ

む」様子、すなわち修行のため海岸部を巡っている状況を詠んだものである。

### (オ)『行尊大僧正集』

返ちと申し方よりまかりいでしに、あらいそにみるめとりし程に、たゞ一人ぐしたる同行のかたみにまどひて、ひとりよぶが、あらいそにたづねありきしに、つりするあまのかうなぎするがありけるに、ものとへば、我には哥をよみてぞとふといひしかば

あらいそにみちまどはしてわがともはあるかあらぬかまつかまたぬかたづねかねて、もとのいはやへまかりしに、みちにあまふねのありしに、かきてをし侍し

わがごとくわれをたづねばあまを船人もなぎさのあとゝこたへよ<sup>⑦</sup>

『行尊大僧正集』は行尊(一〇五五—一一三五)の青壮年期の作品を集めたものだが、これは行尊が「あらいそ」すなわち海浜で修行していた時、同行者を見失って捜し歩いたというもので、「もとのいはや」はおそらくは「窟籠り」<sup>⑧</sup>をしていた洞窟であろう。

### (カ)『新猿楽記』

次郎者一生不犯之大験者、三業相応之真言師也。(中略)通大峰・葛木、踏辺道<sup>⑨</sup>年々。熊野・金峰・越中立山・伊豆走湯・根本中堂・伯耆大山・富士御山・越前白山・高野・粉河・箕尾・葛川等之間、無不競<sup>⑩</sup>行挑<sup>⑪</sup>験。山臥修行者、昔雖<sup>⑫</sup>役行者・淨藏貴所、只一陀羅尼之験者也。今於<sup>⑬</sup>右衛門尉次郎君者、已智行具足生仏也。

これは『新猿楽記』にみえる著名な史料だが、「辺地」は「へち」と読むことができ、「へち」は海辺難路を意味する和語であるから、場所は特定できないものの、大験者の次郎が辺路修行をしていたことが示されている。

ところで、五来重氏は辺路修行の実態について次のように述べておられる。すなわち辺路修行というのは、海岸にこのような巖があれば、これに抱きつくようにして旋遶行道したもので、これが小行道である。これに対して東寺(最御崎寺―筆者註)と西寺(金剛頂寺―同)の間を廻ることは中

行道になろう。そしてこのような海岸の巖や、海の見える山上の巖を行道しながら、四国全体を廻ることが大道で、これが辺路修行の四国<sup>①</sup>遍路であつたらうと私はかんがえている<sup>②</sup>。

五来氏によると、辺路修行は単に海辺を歩くだけでなく、各地の行場での修行を伴うものであった。基本的には支持されるものだが、辺路修行の実態については当時の説話史料によってもう少し具体化できるように思われる。

『本朝法華験記』や『今昔物語集』などには平安時代後期の諸国を遍歴する修行僧が数多く取り上げられている。そうした説話を読んで気づくことは、当時の修行僧は単に諸国を廻遊していたのではなく、諸々の靈験所に詣で、そこで修行をしていたことである。

(キ)『本朝法華験記』中一六〇

沙門蓮長、(中略)亦往詣金峰・熊野等諸名山、志賀・長谷等諸靈験<sup>③</sup>。往於一々靈験名山、読誦千部妙法経<sup>④</sup>。日本国中一切靈所、無不巡礼必誦千部<sup>⑤</sup>。(後略)

(ク)『本朝法華験記』下一八六

道命阿闍梨、傳大納言道綱卿第一男也。(中略)巡礼処々靈験勝地<sup>⑥</sup>、薰修年尚矣。(後略)

(ケ)『本朝法華験記』下一八九

沙門海蓮、越中国人。(中略)歎傷此事、参向立山・白山及余靈験<sup>⑦</sup>、祈禱此事<sup>⑧</sup>。難行苦行、断食断塩、誦此三品<sup>⑨</sup>。(後略)

(コ)『今昔物語集』一三一

今昔、仏ノ道ヲ修行スル僧有ケリ。名ヲバ義睿ト云フ。諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、国々ニ行キ所々ノ靈験ニ参テ、行ヒケリ。(後略)

(サ)『今昔物語集』一三二—一三四

(前略)其ノ時ニ、世ニ一人ノ僧有リ。名ヲバ良賢ト云フ。(中略)諸ノ国々ノ靈験所ヲ廻リ行ヒテ、住所ヲ定タル事無クシテ修行スル間ニ、不慮ノ外ニ道ニ迷テ、此ノ洞ニ至ヌ。(後略)

(シ)『今昔物語集』一三一—一七

今昔、雲浄ト云フ持経者有ケリ。若ヨリ日夜ニ法花経ヲ読誦テ年ヲ積メリ。而ル間、国々ニ行テ、所々ノ靈験ヲ礼マム、ト思テ、熊野ニ詣ルニ、志摩ノ国ヲ過ル間ニ、日暮レテ忽ニ可行宿キ所無シ<sup>⑩</sup>。(後略)

(ス)『今昔物語集』一四一—一七

(前略)其レニ、三井寺ニ有ケル僧、仏道ヲ修行スルガ故ニ、所々ノ靈験所ニ詣テ、難行苦行スルニ、(後略)

(セ)『今昔物語集』一五一—一七

今昔、法広寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ニ平珍ト云フ僧住ケリ。幼ノ時ヨリ修行ヲ好テ、常ニ山林ヘ参リ、不至ザル靈験所無シ。(後略)

(ソ)『今昔物語集』一五一—一八

今昔、仏ノ道ヲ修行スル僧有ケリ。六十余国ニ不至ヌ所無ク行テ、貴キ靈験ノ所々ヲ礼ケル間ニ、鎮西ニ行キ至ニケリ。(後略)

(タ)『今昔物語集』一七一—

今昔、西ノ京ノ辺ニ住ム僧有ケリ。(中略)此レニ依リ、国々ニ行テ、地藏ノ靈験有所ヲ尋テ、願フ心ヲ語ルニ、(後略)

これらの史料から知られるのは、「諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、国々ニ行キ所々ノ靈験ニ参テ、行ヒケリ」「国々ニ行テ、所々ノ靈験ヲ礼マム、ト思テ」「六十余国ニ不至ヌ所無ク行テ、貴キ靈験ノ所々ヲ礼ケル間ニ」とあるように、各地の靈験所を巡り歩き、「難行苦行」を行うことが当時の廻国修行の実態だったことである<sup>⑪</sup>。

そうすると、四国における辺路修行についても同様のことがいえるのではないだろうか。すなわち、海岸部の各地に靈験所があり、そこで修行を行いつつ各靈験所を巡り歩くのが「海辺ノ廻」の実態だったのでないだろうか。実際、四国には海岸部に靈験所が多い。たとえば、その一つが湯嶋である。源為憲(？—一〇一一)が著した空也の伝記『空也誄』には空也の湯嶋での修行の様子を次のように記している。

(チ)『空也誄』

(前略)少壯之日、以「優婆塞」、歴「五畿七道」、遊「名山靈窟」。(中略)阿波・土佐兩州海中有「湯嶋」矣。地勢靈奇、天然幽邃。傳有「觀世音菩薩像」、靈驗揭焉。上人為「值觀音」故、詣「彼嶋」。六時恭敬、數月練行、終無「所見」。爰絶「粒向像」、腕上燒「香」、一七日夜、不「動不眠」。最後之夜、所「向尊像」、放「微妙光」。瞑「目則見」、不「瞑無見」。於是燒「香」一腕、焦痕猶遺。(後略)

この他、土佐国の室戸は、『三教指帰』に「躋攀阿国大龍嶽、勤念土州室戸崎」、谷不「惜響」、明星来影」とあるように、空海の修行の場として著名であり、『梁塵秘抄』には「四方の靈驗所」の一つにあげられている。

(ツ)『梁塵秘抄』

四方の靈驗所は 伊豆の走湯 信濃の戸隠 駿河の富士の山 伯耆の大 山 丹後の成相とか 土佐の室生戸 讃岐の志度の道場とこそ聞け

また室戸にある金剛頂寺の解には「件寺者、弘法大師祈下明星初行之地、智弘和尚真言法界練行之砌、天人遊之處、明星来影之嶺也、因茲大師手造立薬師佛像、安置件嶺、不「論男女」輒不「乱入」之道場也。是以始「自国宰」至于庶民、為「仰」当寺佛法之靈驗、各所「施」入山川田畠等也」と述べられている。『今昔物語集』一七一六には室戸津にある津寺の地藏靈驗譚が載せられている。

同国の足摺岬は、後述するように室戸岬と並んで補陀落渡海の地である。その地にある金剛福寺の観音菩薩靈驗譚は『とはすがたり』にみえるところだが、応保元年(一一六一)一二月の「土佐国幡多郡収納所宛行状写」<sup>(18)</sup>にすでに「奉「遇」觀音慈悲之垂跡」と記され、「蹉跎御崎千手觀音經供田」三町が宛行われている。

讃岐国の曼荼羅寺は空海生誕地普通寺の近くにあり、「靈驗之砌顯然也」<sup>(19)</sup>「此御寺靈驗揭焉」、南の山は「伴山中大師給「点入」有「驗靈地」とされてい<sup>(20)</sup>る。また、「讃岐国曼荼羅寺僧善範解案」<sup>(21)</sup>には、「自「始」鎮西」諸国修行間、

件道場参詣、「右、善範為「弘法修行」、自「生所鎮西」出家人道、年来之間、五畿七道之間、交「山林跡」、而以「先年之比」、讃州到来、有「事縁」、大師之御建立道場参詣」とある。

同国の志度寺は、『梁塵秘抄』(前掲史料(ツ))に「四方の靈驗所」の一つとしてみえている。同寺の本尊木造十一面觀音立像は平安初期のものであり、室町時代初期成立の『志度寺縁起』に觀音靈驗譚がみえるので、平安末期の志度寺は觀音靈場であったと考えられる。

このように四国の海岸部には多くの靈驗所があった。従って、一般の廻国修行者と同様四国の辺路修行者もまた靈驗所で「難行苦行」を行いつつ各地の靈驗所を巡り歩いていたのではないだろうか。もちろん、著名な靈驗所以外にも多くの行場があり、そこでも厳しい修行が行われていたであろう。平安時代の四国の辺路修行は単に海辺難路を歩くだけではなかったのである。

## 二 四国と浄土信仰

先述したように、平安時代後期になると海岸部を巡り歩く僧侶たちが史料上に多くみられるようになるのだが、彼らが修行の場としたのは決して四国だけではなかった。

(テ)『梁塵秘抄』

われらが修行に出でし時 珠洲の岬をかいさわり うち巡り 振り捨てて 一人越路の旅に出でて 足打せしこそあはれなりしか

「かいさわり うち巡り」は「巖壁にしがみつきながら、断崖もしくは巨巖を廻<sup>(22)</sup>ることを意味しており、能登半島の先端部、珠洲岬を巡る辺路修行の存在を示すものである。また史料(オ)の和歌は、行尊は熊野で修行していたことが知られるので、紀伊あるいは伊勢の海岸で読まれた可能性が高い。

このように、辺路修行は日本各地の海岸でなされていたのだが、史料(ア) (イ) (ウ)にみられるように、辺路修行は四国のそれが著名であり、辺路修

行は四国で盛んに行われていたようである。では、それは何故なのであろうか。本章ではこの問題について考えてみることにしたい。

四国と辺路修行の関係を考える際にまず最初に検討すべきはやはり補陀落信仰であろう。すでに指摘されているように、平安末期の辺路修行の背景には日本古来の海洋信仰に加えて補陀落信仰などの浄土信仰があったのだが、この補陀落信仰において四国は特別の場所、すなわち熊野と並んで補陀落渡海の地だったのである。

補陀落渡海とは南方海上にあると信じられていた観音浄土<sup>①</sup>補陀落に向かつて渡海することであり、一種の捨身往生であった。補陀落渡海で最も有名なのは熊野である。熊野からの補陀落渡海がいつから始まったかは不明だが、少なくとも平安時代末期には行われていたことは確実である。

(ト)『台記』康治元年(一一四二)八月一八日条

招権僧正覚宗<sup>一</sup>習千手経<sup>二</sup>、至陀羅尼止之。後日可習之。僧正語云、少年籠那智之時、有<sup>三</sup>独僧<sup>二</sup>云、我現身祈<sup>三</sup>參補陀落山<sup>一</sup>、小舟上造<sup>三</sup>立千手観音<sup>一</sup>、奉<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>楫、祈請已及<sup>三</sup>三年<sup>一</sup>、折<sup>レ</sup>北風七日不<sup>レ</sup>止也、如<sup>レ</sup>此経数日<sup>一</sup>、得<sup>レ</sup>大北風<sup>一</sup>、僧慶乗<sup>レ</sup>舟、向<sup>レ</sup>南礼拜無<sup>レ</sup>止時<sup>一</sup>、差<sup>レ</sup>南遙行、僧都以為希有、登<sup>レ</sup>山見<sup>レ</sup>之、覚宗同見、七ヶ日之間風不<sup>レ</sup>止、料<sup>レ</sup>知願成就<sup>一</sup>矣。余云、何時哉、答堀河院御時也。(後略)

これは堀河天皇の時に那智からの補陀落渡海を見たという権僧正覚宗の話。藤原頼長が書きとめたものである。また、『本朝法華験記』下<sup>②</sup>一一二八には同じ紀伊半島の「美奈倍郷」から道祖神が補陀落に渡った話が載せられている。<sup>③</sup>

補陀落渡海は四国の室戸、足摺からも行われていた。

(ナ)『観音講式』

(前略)一条院御時、阿波国賀登上人、深欣<sup>④</sup>彼山<sup>一</sup>、頻有<sup>⑤</sup>夢想<sup>一</sup>。長保二年八月十八日、自<sup>⑥</sup>土佐国室戸津<sup>一</sup>、相<sup>⑦</sup>具弟子一人<sup>一</sup>、遂以進発。一葉之船、如<sup>レ</sup>飛向<sup>レ</sup>南。(後略)

『観音講式』は貞慶(一一五五—一二一三)の著で、一条天皇の時に賀登上人が室戸から補陀落渡海したとしている。鴨長明著の『発心集』三—五にも讃岐三位の乳母夫が土佐国から補陀落渡海を行った話がみえるが、賀登上人の例にならったとあるので、おそらく渡海地は室戸であろう。<sup>⑧</sup>

足摺については、時期は少し下るが、次の長門本『平家物語』にみえる補陀落渡海が有名である。

(三)長門本『平家物語』四

(前略)さては昔、理一と申僧ありき。有漏の身をもて、ふだらく山を拜んと誓ひて、一千日の行ほうを始めて、御弟子のりけんと申一人ばかり召具して、御船にめして、おしうかび給ふに、むかひ風烈しく吹きて、元のなきさに吹返す。理一猶行法の功をはらざりけりとて、又百日の行法をし給ひて、百日過ければ、聖人もとより人を具してはかなふまじとて、御船にたゞ一人めす。彼舟はうつほ船なり。白きぬの帆をかけて、順風に任す。げにもおいて事をへだて、遙に遠ざかる。御弟子のりけんは、聖人に捨てられ奉りて、ふだらくせんををがむべからざる事をかなしむ。輪廻して生死を生まじきやらんと、はや御船のかくる、ほどなれば、名残をしくしたひ奉り、余りのたへがたさに倒れふし、足摺をしておめきかなしむ。足摺地をうがち、身をかくすばかりになりぬ。(後略)

これは補陀落渡海をおこなった理一に取り残された弟子僧のりけんが地をうがつほど足摺りをして悲しんだというもので、足摺の地名由来譚である。この史料より足摺からも補陀落渡海が行われていたことが知られる。<sup>⑨</sup>

このように四国は補陀落渡海の地であった。とすると、「初期の辺路修行者たちは、補陀落浄土に渡ることを望みながら、常に四国の辺路を巡っていた<sup>⑩</sup>」わけであるから、実際に渡海するかしないかは別として辺路修行者が補陀落渡海のいわば本場である四国に数多く集まるのはごく自然なことではな

いだろうか。次に、補陀落信仰と並んで当時盛んであったのは西方極楽浄土への往生を

願う阿弥陀信仰であったことはいうまでもない。平安時代後期畿内で西方浄土への往生を願う人々の信仰を集めたのは四天王寺である。四天王寺の西門は「当極楽土東門中心」とされ、「諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念仏ヲ唱フ。于今不絶シテ、不参又人無シ。」といわれていた。<sup>(29)</sup>『赤染衛門集』、『梁塵秘抄』には次のような和歌や今様が載せられている。

(ヌ)『赤染衛門集』

西大門にて、月のいとあかりしに

ここに於て光を待たむ極楽に向かふと聞きし門に來にけり

(ネ)『梁塵秘抄』

極楽浄土の東門は 難波の海にぞ対へたる 転法輪所の西門に 念仏する人参れとて

治安三年(一〇二三)には藤原道長が、永承三年(一〇四八)には藤原頼通が参詣し、長元四年(一〇三一)上東門院参詣の様子は『栄花物語』巻三に「西の時ばかりに、天王寺の西の大門に御車とゞめて、波の際なきに西陽の入りゆく折りしも、拝ませ給」と記されている。

難波の海に入水往生した者も多く、保延六年(一一四〇)に入水した西念は有名である。<sup>(30)</sup>また、鴨長明の『発心集』三一六には「或る女房天王寺に参り海に入る事」という説話が載せられている。『金葉和歌集』にみえる次の歌も難波の海での入水を示すものであろう。

(ノ)『金葉和歌集』

屏風絵に、天王寺西門に、法師の舟に乗りて西ざまに漕ぎ離れ行く形か

きたる所をよめる

阿弥陀仏となふる声をかぢにてや苦しき海をこぎ離るらん

源俊頼朝臣

このように四天王寺は西方極楽浄土への往生を願う参詣者で賑わい、西にある難波の海に入水する者も相次いだのだが、四国とその周辺の海についても同様のことがいえるのではないだろうか。

さて、当時の仏教説話集には極楽浄土への往生をとげた人々の話が多数収

められているのだが、それらを読んで気づくことは、往生の地を求めてわざわざ四国に行く人々がしばしばみられることである。いくつかの事例を挙げてみよう。

(ハ)『今昔物語集』一五一—一四

(前略) 観幸何ナル縁ニカ有ケム、堅ク道心発ニケレバ、本寺ヲ去テ、忽ニ土佐国ニ行テ、偏ニ名聞利養ヲ棄テ、聖人ニ成テ年来行ヒケルニ、(中略) 弟子物ノ迫ヨリ臨キテ見レバ、仏ノ御前ニ端坐シテ行ヒ居タリ。

良久ク有ニ、戸ヲ叩テ呼ブト云ヘドモ音モ不為ネバ、戸ヲ放チテ入テ見ルニ、掌ヲ合セテ端坐シテ死テ有リ。弟子等此レヲ見テ、泣々ク悲ヒ貴ムテ、弥ヨ念仏ヲ唱ヘケリ。(後略)

(ヒ)『今昔物語集』一五一—一五

(前略) 長増ガ云ク、我レ、山ニテ廁ニ居タリシ間ニ、心静ニ思エシカバ、世ノ無常ヲ観ジテ、此ク、世ヲ棄テ偏ニ後世ヲ祈ラムト思ヒ廻シニ、只、仏法ノ少カラム所ニ行テ、身ヲ棄テ次第乞食ヲシテ命許ヲバ助ケテ、偏ニ念仏ヲ唱ヘテコソ極楽ニハ往生セメ、ト思ヒ取テシカバ、則チ廁ヨリ房ニモ不寄ズシテ、平足駄ヲ履キ乍ラ走リ下テ、日ノ内ニ山崎ニ行テ、伊予ノ国ニ下ダル便船ヲ尋テ此国ニ下テ後、伊予・讃岐ノ両国ニ乞匄ヲシテ年来過シツル也。(後略)

(フ)『拾遺往生伝』上—一七

沙門蓮待者、丹波国人也。幼年出家、住仁和寺、師事叡算阿闍梨本名。(中略) 而間猶求幽棲、遙入高野。数年之後、内心発願、為仕本算。貧家之人、忽企離山之思。衆人雖相留、強以出山。但至于終焉之時、必成歸之約。其後修行経歴、不定去留、遂到土左国金剛頂寺。承徳二年五月十九日、辞彼西海、帰此高野。(中略) 同六月七日、上人自剃頭整衣、似無惱氣。初出山門、遥赴土州。既而離靈地、漸遠、去人寰亦遠。途中税輿樹下、整服而向西方、手結定印。举声唱、南無三身即一阿弥陀如来、南無大慈大悲観自在菩薩、南無弘法

大師遍照金剛菩薩。如<sub>レ</sub>此称礼、端坐入滅。(後略)

(ハ)『拾遺往生伝』下二一

備中国新山別所定秀上人者、近江国蒲生郡人也。幼年出家、住<sub>二</sub>楞嚴院<sub>一</sub>。(中略) 生年廿一、偏願<sub>二</sub>西土<sub>一</sub>、遂以離<sub>二</sub>山<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>土佐国<sub>一</sub>、住<sub>二</sub>鹿苑寺<sub>一</sub>。

(後略)

(ハ)は醍醐寺の僧観幸がいわゆる二重出家をして土佐国に下り、そこで往生をとげたというものである。(ヒ)は延暦寺の僧長増が突然出奔し、のち弟子の清尋が伊予国で偶然彼を見出すという話である。資料として掲げたのは長増が清尋に出奔の理由を語った部分である。これによるとひたすら念仏を唱えて極楽往生をねがった長増は伊予国に向かい、讃岐・伊予国で門付け乞食をして暮らしていたのである。(フ)は高野山を離れ各地で修行し、土佐国金剛頂寺に至った蓮待が、一旦は高野山に戻ったものの、再び土佐国に行き、「服を整へて西方に向ひ、手に定印を結」んで往生をとげたというものである。(ヘ)は「偏に西土を願ひて、遂にもて山を離れ」た定秀が土佐国鹿苑寺に住したというものである。

このように平安時代末期の四国は往生をとげようとする人々が向かう場所だったのである。もちろん、他の場所で往生をとげたという話もないわけではないが、とりわけ多いのが四国である。

四国での極楽往生という想起されるのが『今昔物語集』一九一―一四の「讃岐国多度郡五位間法即出語」である。これは讃岐国多度郡にいた極悪非道の源太夫が、偶然立ち寄った法会で講師から阿弥陀仏の本願を聞かされて突然発心出家し、首から金鼓を懸けて阿弥陀仏の名を呼びながら西に向かつて慕進し、西海のみえる山上で往生をとげたという話である。源太夫は讃岐国の西岸部まで歩き続けたものと思われるが、「我レ尚此ヨリ西ニモ行テ、海ニモ入ナムト思ヒシカドモ、此ニテ阿弥陀仏ノ答ヘ給ヘバ、其レヲ呼ビ奉リ居タル也」とあるように当初は入水までするつもりだったようである。これは四国の海岸で西方極楽往生を願っての入水が行われていたことを示唆し

ている。四国は西方極楽浄土への往生を願う人々の集まる場所であったが、さらにそこでは入水もなされていたのである。

以上のように、観音浄土にせよ阿弥陀浄土にせよ、往生を願う人々にとって四国は特別な意味を持っていた。四国は浄土への往生の場、渡海の地と認識されていたのである。熊野や四天王寺が持つ意味を四国は併せ持っていたともいえよう。これはやはり四国が都から見て西南の方角にあり、かつ四方が海に囲まれているという地理的条件が大きく関わっていたものと思われる。辺路修行自体は全国各地の海岸で行われたであろうが、四国の海岸は浄土への憧れを持つ人々にとっては特に魅力ある場所であった。四国にとりわけ辺路修行者が多かったのはこうした理由によるものと思われる。

### おわりに

平安時代末期の四国における「海辺ノ廻」、すなわち辺路修行は、単に海辺難路を歩くだけでなく、各地の靈験所に詣で、そこで修行を行うというものであった。当時こうした辺路修行が四国の海岸で盛んであったのは、四国が極楽往生の地であり、補陀落浄土への渡海地と考えられていたためである。本稿で述べたことをまとめると以上の通りである。関係史料が少ないため推測にわたる部分が多くなったが、四国遍路の歴史の解明に少しでも役立てば幸いである。

### 註

- (1)『一言芳談』に平安末鎌倉初期の僧である心戒が「四国修行」をしたとあるが、辺路修行であったかどうかは不明である。
- (2)近藤喜博『四国遍路』(桜楓社、一九七一年)、同『四国遍路研究』(三弥井書店、一九八二年)。
- (3)五来重『遊行と巡礼』(角川書店、一九八九年)。

- (4) 頼富本宏・白木利幸『四国遍路の研究』(国際日本文化研究センター、二〇〇一年)。この他平安時代の辺路修行に触れたものとして、宮崎忍勝『遍路―その心と歴史―』(小学館、一九七四年)、同『四国遍路―歴史とこころ―』(朱鷺書房、一九八五年)、『四国遍路のあゆみ』(平成一二年度遍路文化の学術整理報告書)、『愛媛県生涯学習センター、二〇〇一年』などがある。
- (5) 以下では、霊験所・行場で修行を行いながら海辺の難路を巡り歩くことを辺路修行と呼ぶことにする。
- (6) 以下の和歌史料については、西耕生『四国辺地』覚書―和語『へち』の周辺―(『愛媛国文研究』五二、二〇〇二年)を参照した。
- (7) なお、この和歌は『新古今和歌集』では次のようになっていいる。  
いそのへちの方に修行し侍りけるに、一人具したりける同行を尋ね失ひて、もとの岩屋の方へ帰るとて、あま人の見えけるに、修行者見えば  
これを取らせよ、とてよみ侍りける  
大僧正行尊  
わがごとくわれを尋ねば海人小舟人もなぎさの跡と答へよ
- (8) 『平安時代史事典』(角川書店、一九九四年)。
- (9) 五来重註(3) 前掲書一〇九頁。
- (10) 西耕生註(6) 前掲論文。
- (11) 五来重註(3) 前掲書一一九頁。
- (12) この話は『今昔物語集』一三―一八では次のようになっていいる。  
今昔、蓮長ト云フ僧有ケリ。(中略)亦、金峰・熊野・長谷寺ノ諸ノ  
霊験所ニ詣デツ、各其ノ宝前ニシテ、必ズ法花経千部ヲ誦シケリ。  
(後略)
- (13) この話は『今昔物語集』一四―一五では次のようになっていいる。  
今昔、越中ノ国ニ海蓮ト云フ僧有ケリ。(中略)然レバ、此ノ事ヲ歎  
テ、立山・白山ニ参テ祈請ス。亦、国々ノ霊験所ニ参テ祈リ申スニ、尚  
不思エズ。(後略)
- (14) この話は『本朝法華験記』中―五九では次のようになっていいる。  
(前略)有ニ比丘、名曰良賢。(中略)巡遊一切霊験、無定住  
所。慮外迷山路、至此仙洞。(後略)
- (15) この話は『本朝法華験記』上―一四では次のようになっていいる。  
沙門雲浄、從初発心、専持一乘、常厭世務、樂静閑処。為  
拜霊処、参詣熊野、過志摩国、到於海岸。(後略)
- (16) この話は『本朝法華験記』下―一二四では次のようになっていいる。  
有修行者、其名不詳。往詣霊験所、難行苦行。(後略)
- (17) この点についてはすでに竹居明男氏の指摘がある(同『本朝法華験  
記』の冥界思想、『後期撰関時代史の研究』所収、吉川弘文館、一九九  
〇年)。
- (18) 『平安遺文』三―一〇四七。
- (19) 『平安遺文』七―三二八四。嘉応元年(一一六九)八月の「土佐国金  
剛福寺僧弘睿解」(『平安遺文』七―三五二・三五三)は嵯峨天皇と  
藤原忠通が金剛福寺に三昧供料を施入したとしていいる。
- (20) 『平安遺文』三―一〇二〇、五―二〇一五、三―一〇〇八。
- (21) 『平安遺文』三―一〇〇六、九―四六四一。
- (22) 五来重註(3) 前掲書一一一頁。
- (23) いわゆる『熊野年代記』によると最初の補陀落渡海は九世紀である。  
なお、補陀落渡海については、根井浄『補陀落渡海史』(法蔵館、二〇  
〇一年)が詳しい。
- (24) 『今昔物語集』一三―三四にも同様の話が載せられていいる。
- (25) 『梁塵秘抄』にみえる次の今様も補陀落渡海に関わるものである。  
観音大悲は舟筏 補陀落海にぞ浮かべたる 善根求むる人しあらば  
乗せて渡さむ極楽へ  
観音深く頼むべし 弘誓の海に船浮かべ 沈める衆生引き乗せて 菩  
提の岸まで漕ぎ渡る



なお、補陀落渡海の具体的な方法は、次の『吾妻鏡』天福元年（一二三三）五月二七日条に詳しくみえている。

武州參御所<sup>二</sup>給。帶<sup>二</sup>一封状<sup>一</sup>。被<sup>レ</sup>披<sup>レ</sup>覽御前<sup>一</sup>。令<sup>レ</sup>申給曰、去三月七日、自<sup>レ</sup>熊野那智浦、有<sup>レ</sup>渡<sup>二</sup>于補陀落山<sup>一</sup>之者。号<sup>二</sup>智定房<sup>一</sup>。是下河辺六郎行秀法師也。（中略）彼乗船者、入<sup>レ</sup>屋形<sup>一</sup>之後、自外以<sup>レ</sup>釘皆打付。無<sup>レ</sup>二扉<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>觀<sup>二</sup>日光<sup>一</sup>。只可<sup>レ</sup>憑<sup>レ</sup>燈。三十ヶ日之程食物并油等僅用意云々。

(26) 室戸については『梁塵秘抄』に次のような今様がみえている。

土佐の船路は恐ろしや 室津が沖ならでは しませが岩は立て 佐喜や佐喜の浦々□ 御厨の最御崎 金剛浄土の連余波

ここに「金剛浄土の連余波」とあるのも室戸が浄土への渡海地と考えられていたことを表すものであろう。

(27) 『とはすがたり』にも同様の話が収められている。

(28) 頼富本宏・白木利幸註（4）前掲書五三頁。

(29) 『今昔物語集』一一一一。

(30) 『扶桑略記』治安三年一〇月二八日条。

(31) 『範圍記』永承三年一〇月一九日条。なお、平範圍は四天王寺西門を「極楽之東門」と記している。

(32) 西念については、角田文衛『平安の春』（講談社、一九九九年、初出は一九八三年）が詳しい。

(33) 次の史料（『撰集抄』五一一〇）は鎌倉期のものだが、最愛の子を失って出家した男が諸国遍歴の末讃岐国志度で往生をとげたという話である。近き比、近江の国に男侍りき。（中略）しかるに、最愛の子なん侍りけるが、病に犯されて、医家薬をつくし、陰陽術を極めしかども、露しるしなくて、つひにはかなくなりき。父母悲しむ事理に過ぎたり。さこそは侍りけめ。かくて五句やうやく過ぎて、此父おもふやう、あはれ情なかりけるは生死かな。そこばくの宝、さらに身をさゝゆる物には侍ら

ざりき。しかじ我仏道に入なん、と思ひて、妻にいとまを乞ひ、やがてもとどり切つて、いづちともなくまよひ出にけり。深く山に入るときは、木の葉のめぐみ散るにつけて、無常の觀をなし、浦のほとりを過る時は、生死の海はやく事を思へり。かくて、はるかに本国をはなれて、讃岐の国志度と云所にて、西にむかひ、たなごころをあはせて往生し侍り。（後略）

この他、『今昔物語集』一四一四四には、延暦寺の陽信という僧が、「阿闍梨、下臈ニ被超ニケレバ、世ノ中冷ジガリテ」、伊予国に向かったという話がある。また、『今昔物語集』一九一一には、觀音菩薩に間違われた信濃国の王藤が出家して五年程は横川にいたが、「其ノ後ハ土佐ノ国ニゾ行ニケル」という話がみえるが、土佐国に行った理由は不明である。

(34) (フ) の史料で土佐国を「西海」としていることは注目される。南海道に属する土佐国は本来ならば南海と表記されるべきであり、実際少し後の『高野山往生伝』の蓮待伝ではこの部分を「南海」としている。土佐国を「西海」と表現したのはそこで蓮待が往生したことによるものであろうが、筆者三善為康の土佐国に対する認識が示されており、非常に興味深い。

(35) 平安京では京の西郊にある愛太子山が往生地として史料にしばしばみえている（『本朝法華驗記』上一一六・三九、『今昔物語集』一七一―四など）。西山には寺院が多く建てられ、「平安京居住者の宗教空間」であった（京楽真帆子「平安京の「かたち」、『ものから見る日本史 都市』、青木書店、二〇〇二年）。都の人々にとって西の方角は特別の意味を持っていたのである。なお、四国と同じ方角には九州もあるが、九州は遠距離すぎたのではないだろうか。

(36) ここでは辺路修行者が浄土への往生を願っていた点を強調したが、『今昔物語集』一七一―一五に「四方の靈驗所」の一つである伯耆国大山

で六年間修行して験力を身に付け人々の帰依を得た僧の話にみられるように、辺路修行者には験力を獲得するという現実的な目的もあった。これは当時の仏教信仰が現世安穩・後生善処という二世安樂的信仰形態が基本であったことからすれば当然のことだが、ここで指摘したのは浄土往生を願うという点では四国が特別の場所だったことである。

(37) 律令制下の官道(南海道)は四国の海岸沿いを通る環状道路であったとされているが(足利健亮「山陽・山陰・南海三道と土地計画」、『新版古代の日本四 中国・四国』所収、角川書店、一九九二年)、このことが四国における「海辺ノ廻」といかに関わるかは今後の検討課題である。